

「第40回全国中学生人権作文コンテスト」
中央大会法務省人権擁護局長賞
和歌山県大会最優秀賞和歌山地方法務局長賞

平等な社会を目指して

橋本市立紀見北中学校3年 石井 ^{いしい はるた} 悠太 さん

「この場から今すぐ逃げ出したい」

吃音を抱えている人なら、このように考えたことがきっとあるはずだ。僕もその一人である。

吃音とは、発声の最初の音を繰り返す、もしくは伸ばす、または言葉が出ない症状を指す発話障害の一つである。いつも起こるとは限らないが、突然起こることや、治るという定義が医学的に解明していないことから、曖昧な障害とされている。僕は、「お、お、お、おはよう」と繰り返す「連発」や、「おーおはよう」と伸ばす「伸発」はなく、最初の言葉が出ずに間があく「難発」という症状がある。言いくいア行や、力行以外の言葉で言い始めたり、つなげて言ったりすると言いやすいため、周りの人に気づかれることはほぼなかった。あの日までは。

中二の夏、僕はソフトテニス部のキャプテンになった。キャプテンには、集合する度に声がけをするという役割があり、毎日何回も声を張って言わなければならなかった。始まりには「お願いします！」終わりに「ありがとうございました！」最初の頃は問題なく言えていた。このたった十文字程度の言葉が思うように言えなくなるなんて、思いもしなかった。

しかし、その時は突然やってきた。「お願いします！」の「お」が言えない。間ができて、みんなが僕の方を見て、どうしょう、と焦った後にやっと出た僕の声は、「お、お願いします」と、詰まってしまった。友達が、詰まった僕の真似をした。人から見ると些細なこと、悪気もなかったのかもしれないけれど、僕はとても辛かった。それ以降、一日中部活の声がけのことが気になって頭から離れなくなった。気にすればするほど、吃音はひどくなる一方で、スムーズに声がけができることはほぼなくなってしまった。僕の真似も続いた。声がけをする前はいつも、その場から逃げ出したかった。そんな日が何日も続いた。

苦しくて、悔しくて、耐え切れなくなった。母と顧問の先生に今までのことを打ち明け、相談した。「話してくれてありがとう、大丈夫、いつもよく頑張ってくれてありがとう」と僕を受け入れてくれて、優

しく話を聞いてくれた。一緒に解決策を考えてくれた。本当に安心した。そして、部活の同級生に、僕が吃音であること、声がけのことでずっと悩んでいたことを自分で話した。みんなは僕の話真剣に聞いてくれて、「そうやったんや、話してくれてありがとう、声がけは一人でせずにみんなで交代してしよう」と言って励ましてくれた。肩に変に力が入っていたのが一気に抜けて、ホッとした。同時に、今まで我慢していた、苦しさや、悔しさなどの様々な感情が心の中からドッと溢れてきて、まぶたがとても熱くなった。今まで、家族以外の人に吃音のことを自分から話したり、相談したりしたことがなくてすごく不安だったが、覚悟を決めて打ち明けることができて本当に良かったと思った。みんなが僕を受け入れてくれたことで、不安がほぼなくなった。みんなに、ありがとうと思った。

それから、部活も普段の生活も楽しめるようになった。しかし、吃音が治ったわけではないので、言いにくい言葉は言い換えて話したり、話すのを我慢したりするのは相変わらずだった。けれど、以前に比べて気楽に過ごせるようになった。それは、吃音の僕を受け入れてくれる人達がいるということが分かって、安心できたからだろう。

悩み、苦しんでいた時、どうして僕だけがこんな目にあうんだ、と思っていたが、今はそう思っていない。僕以上に辛い思いをしている人だって必ずいるだろうし、どんな人でも悩んだり苦しんだりすることがあるはずだ。僕がそうだったように、一見普通に元気そうな人でも、もしかすると何か悩みを抱えて困っているのかもしれない。家族や友達にいないだろうか。もし、そんな人に僕が気付いたり、相談されたりすることがあったら、勇気を振り絞って話してくれているのだと思い、話をちゃんと最後まで聞いてあげたい。知らない内容でどうしたらいいか分からなくても、理解するための努力をする。僕がしてもらって嬉しかったことを、他の人にもしてあげられる人間になりたい。

障害を抱える人もそうでない人も、みんなが心地良く快適に過ごすことのできる社会とは、どういうものなのかを意識していきたい。人それぞれの個性を受け入れ、誰もが平等に生きることができると社会の実現に向けて、まずは、一人ひとりが自分の身近な存在から理解を深めていくことが大切なのではないだろうか。